

平成 20 年度日本医療薬学会がん薬物療法海外派遣研修報告

鹿児島大学医学部・歯学部附属病院 柴山良彦

本研修では米国臨床腫瘍学会（ASCO: American Society of Clinical Oncology）年会への参加とテキサス州MDアンダーソンがんセンターでの研修を行い、最新のがん治療に関する情報収集と病院施設などの見学を行った。

ASCO は米国の学会であるが、海外の学会員も数多く所属しており、事実上の国際学会である。日本からも多くのがん専門医などが参加していた。臨床試験に関する最新の研究成果だけでなく、著名な研究者による基調講演や教育講演が充実している。腫瘍生化学の部門では、がんの診断・治療のかぎとなる分子や分析する手法について報告があった。がんの治療において低酸素状態に対する抵抗性は抗悪性腫瘍薬や放射線に対する抵抗性を高めるので、臨床における重要な問題である。低酸素状態において発現が誘導される HIF1 α を制御している分子である LOX を阻害することで、生存率が動物において大きく改善されることが報告された。分子標的薬剤によりがん化学療法が大きく変化しているが、LOX 阻害剤の臨床応用が望まれる。

テキサス州MDアンダーソンがんセンターは U.S. News 誌の調査でがん領域における病院ランキングで全米 1 位に位置づけられたがん医療の最先端病院である。本研修では肉腫治療部門での講義、治療部門の見学および薬剤部の医療薬剤業務の見学を行うことができた。MDアンダーソンがんセンターは量・質とも日本の医療施設を凌駕している。職員は 16,000 人以上で、ベッド数は 521 であり、ベッドが不足しているため施設を増築中であった。化学療法のほとんどは外来で行われており、多くの臨床試験が行われていた。治験は年間 1,000 件以上行われており、最新の治療を求めて日本からも多くの患者が訪れるとのことであった。日本のがん医療と比べて進んでいる領域としては、薬剤部における薬剤経済学および財務部門が充実していること、生物統計学専門家を多数擁していること、臨床試験部門が充実していること、多くのボランティア活動により支えられていること、患者向け情報提供が充実していることなどがあげられる。

今回の研修では、がん治療研究の進展の速さを実感し、がんに関わる医療薬剤業務を学ぶことができた。MD アンダーソンがんセンターでの研修では我々の医療施設でさらに改善しなければならない点を学ぶことができた。今後は最新のがん医療、医療経済学的分析や患者向け医療情報サービスなどを導入し、医療薬学に関する知識・技能をさらに高め、米国の水準に追いつくだけでなく、世界に通用する医療薬剤業務を展開できるように努力していきたい。